



益田市・萬福寺（庭園）

近畿島根県人会
だより
号 外

令和4年
10月23日発行

この度、島根の歴史について執筆されておられる、島根県大阪事務所田中博一氏に、島根と近畿の歴史に
関連するコラムを連載いただきます。

近畿・島根歴史探訪コラム

一ノ谷合戦と益田兼高の英断

源平合戦での有名な一場面といえ、一ノ谷の合戦における源義経の鶴越（ひよどりごえ）の逆落としがあげられます。この一ノ谷の合戦において石見国の武将が参陣していたこと、しかも源氏側に参陣していたことをご存じでしょうか？ その武将は御神本兼経（みかもとかねつね）という武将です。後の壇ノ浦の戦いでは敵船二五艘を捕獲するなどの功績を挙げ、恩賞として益田荘を与えられたことから益田兼高と名前を変えています。そう、中世を通じて石見国に大きな影響力を持っていた益田氏の祖とも言える人物です。ここで少しばかり疑問が湧きます。一ノ谷の合戦時の源氏軍といえ、大將は源範頼、源義経ですが、この軍はほんの二ヶ月前に源（木曾）義仲から京の都を取り戻したところ、益田兼高をはじめ西日本の武将達にとっては東国からやってきたばかりの坂東武者と、都落ちした



萬福寺

時宗益田道場として平安時代に建立され、当初は安福寺号し益田川河口付近にありました。しかし大津波で流出してしまい、後の1319年、游行4代吞海上人が再興しました。1374年には益田七尾城11代城主が現在の地に移築して萬福寺と改称、益田家の菩提寺と定められました。

その後、1479年に15代城主益田兼堯が歌聖・雪舟を招き、石庭を造らせました。1866年長州征伐益田口戦争の際には、幕府軍の陣営となり総門は焼失しましたが、本堂や庫裏はそのまま残っています。鎌倉時代の建築様式の本堂（重要文化財）、雪舟が築いた庭園（史跡及び名勝）、仏教の教えを表す「二河白道図」（重要文化財）、南蛮貿易によりもたらされた「華南三彩壺」など、中世益田文化を代表する文化財が集まる寺院です。国重要文化財、国指定名跡及び名勝。（益田市観光ガイドより）

とはいえ京の都で栄華を誇り天皇と三種の神器を手中にし瀬戸内での制海権を回復していた平家一門と、どちらが信用できるか？ という話です。益田兼高は何故、源氏軍に味方したのでしょうか。益田兼高はそれほど人を見る目、未来を見とおす力

があったのでしょうか？ 益田氏といえ、中世を通じて西石見で大きな勢力となり、氏族の三隅氏、周布氏などと時には争い、時には連携して覇を競っていました。さらに雪舟を招き萬福寺や医光寺へ庭園を造作するなど、現代まで残る中世文化を築き上げました。それ



医光寺（庭園）

臨済宗東福寺派のお寺ですが、もとは天台宗崇観寺の塔頭でした。崇観寺は1363年に創建され、足利将軍の台翰（手紙）をもって住職を任命したほどの格式のある大伽藍でした。益田兼見は本尊の釈迦如来坐像作成の大檀那（スポンサー）となっています。

文明年間（1469～1486）第七代住職雪舟はこの崇観寺の塔頭のひとつに庭園を残しました。その後、崇観寺は衰退していき、17代益田宗兼によって医光寺が開基しました。

医光寺の雪舟庭園は国史蹟および名勝に指定されており、池泉鑑賞半回遊式の庭園で、鶴池に亀島を配置した吉祥の庭となっています。

毎年3月半ばには枝垂れ桜が華やぎを添え、5月には一面のツツジ、夏は緑が涼しく、秋には大きな楓が赤く染まっています。国指定史蹟及び名勝、国登録文化財、県指定有形文化財。

（益田市観光ガイドより）



三宅御土居跡

益田氏の居館跡と考えられています。この館跡の最大の特徴は、東西に残る高さ5mの土塁です。南側の土塁は現存していませんが、発掘調査により1m弱の土塁が見つかりました。2ha余りの広さがあり、同規模の領主の館と比較して2倍の大きさがあります。この居館は益田氏が、関ヶ原合戦後に須佐に移封されるまで使用されていました。平成16年に七尾城跡とともに益田氏城館跡として史蹟となっています。

（益田観光ガイドより）

ただの勢力を得るために、益田氏は日本海を通じた交易を積極的に行っており、海洋的領主としての性格が強かったのではないかと、いわれてはいます。高津川の河口近くに位置する中須東原遺跡からは中国・朝鮮製の陶磁器や木製の荷札、鍛冶場跡なども見つかった。おり、交易拠点として栄えていたところとが分かってはいます。また毛利との和睦の際には蝦夷地から仕入れた昆布や数の子や、虎の皮などを贈っており、交流の幅広さがうかがえます。となると先の問題について、源平合戦の時点で益田氏が重

要になりません。そもそも「壇ノ浦の戦いで敵船二五艘を捕獲」できるほどの水軍を有していたのですから、相当の勢力を持つていたはずで、そして平家、平清盛は当時の国際貿易港を博多から福原（現神戸市）へ移そうと考えていました。これは西日本で水軍を擁する勢力にとって死活問題であり、平家との共存共栄は考えられませんが、（当時の水軍は戦闘だけでなく交易や漁労など、船を使ってできることは何でもやっています）

したがって益田兼高が源氏軍に味方した理由は「敵の敵は味方」という理屈ではないでしょうか。それでも、一ノ谷の合戦時点で源氏軍に参加した西日本の武將は益田兼高のみであり、兼高の選択は英断といえるものだと思います。その英断によって、現在の中世益田の歴史文化が築かれて今に至っているのではないのでしょうか。



中須原東遺跡
文化庁「文化遺産オンライン」
QRコード

【コラム筆者：田中博一氏のご紹介】

島根県邑南町出身。農業普及員（花き専門）、島根県農業技術センター等を経て、令和3年4月から大阪事務所勤務。著書に『石見戦国史伝』『浜田城史伝』（ハーベスト出版）があり、島根の歴史を分かりやすく紹介している。